

巧妙さ際立つトランプ対中外交

米国の新大統領トランプ氏には外交経験はまるでなく、そのうえ無謀で予測不能な人物であるかのごとく言いつるアナリストが絶えないが、謬見であろう。大統領選勝利の頃から現在にいたる氏の行動様式から判断する限り、その外交的手腕にはみるべきものがあるというのが私の直感である。

シリア爆撃で北への関与促す

トランプ氏は米国の覇権に刃向かう現在ならびに将来の新覇権国家が中国であることを正しく認識し、オバマ政権時代の寛容で融和的な政策を転じて、早くも対中牽制のための有力なカードをみせつけ始めた。その一つが、当面の最重要課題である北朝鮮問題の解決に中国を強引に引きずり込もうとする策であり、もう一つが、米国は「一つの中国」原則に縛られないとする、胸中に秘めた氏の策をのぞかせたことであろう。

トランプ氏が北朝鮮に対するオバマ時代の「戦略的忍耐」政策を放棄し、脅威が高まれば軍事行動も選択肢になるといふ政策に転じたのは、相対的にその力を減じつ

つあるとはいえ、なお他を庄する覇権力を擁する米国としては至極当然のことであろう。就任後、最初の歴訪にティラーソン國務長官を日韓に赴かせて、新政策を両国に伝えるという迅速さであった。

4月7日の米中首脳会談において、トランプ氏は習近平国家主席に北朝鮮問題について中国がより積極的な役割を演じるべきであり、さもなければ米国は単独で行動すると主張した。さらに、前日の歓迎夕食会の最中に、米国のシリア空爆についての詳細を伝えたことが後に明らかにされた。

北朝鮮はシリアに化学兵器の技術移転を長らく続けてきた。中国が北朝鮮の行動を抑止できないならば、米国が単独行動も辞さないという主張は鋭い現実味をもって中国に伝わったことだろう。首脳会談の最中にミサイル攻撃の拳に出る、と驚くべき大胆さである。実際、4月中旬の国連安保理

正論



拓殖大学学事顧問 渡辺 利夫

のシリア非難決議に、ロシアは拒否権行使したが、中国は棄権にとどめたのである。

「狡知」知らしめた台湾カード

加えて、トランプ氏は一つの中国原則に大いなる違和感をもって、昨年12月2日、トランプ氏は台湾総統の蔡英文氏との電話会談に臨み、蔡氏から大統領就任への祝意を伝えられ、トランプ氏は蔡氏を「The President of Taiwan」と呼びかけたという。

さらにも今年1月13日、トランプ氏は米紙とのインタビューで、中国と台湾がともに一つの中国に属する、という原則に自分は縛られない、米中問題のすべてが交渉の対象だ、という見解を明らかにした。

と猛反発したのだが、トランプ氏にとつてはこれも織り込み済みのものだったはずである。

その後、トランプ氏は習氏との電話会談で、一つの中国原則を尊重すると応じた。トランプ氏の譲歩ではあるが、中国が他国から言及されることを最も嫌悪するこの問題を、トランプ氏が重要な政治的カードとして隠し持っていることを中国側に知らしめたのは、氏の外交的「狡知」であろう。

中国は今後「米中新型大国関係」などという「夜郎自大」の表現を用いることには自制的にたがざるをえまい。党大会を今秋に控えて国内権力闘争に鎗を削り、外交に割くエネルギーが薄れているこの時期に一つの中国原則を持ち出したことも、同氏の外交的取引の巧妙さを物語っている。

挑戦者への不作為が危機招く

台湾民進党の蔡氏は前総統の国民党の馬英九氏とは異なり、「92年コンセンサス」(九二共識)の存在を認めていない。共識は、1992年の中台香港協議の場において双方が一つの中国(一個中

国)原則は守るものの、台湾側はその解釈は双方異なる(各自表述)とし、中国側は文字通りの一つの中国を堅持する、というものと怪しく多分に幻のものが、中国はこれこそが中台関係を律する政治的基礎だと主張してやまない。台湾がこの共識を認めなければ当局間による交渉の一切には応じないとも言っている。

世代交代にともない台湾の「現状維持」が強固な民意となつて登場した蔡政権は、中国にとつていよいよの難物である。この時期を捉えて米国は台湾に2240億円相当の武器を売却する意向を発表した。旧国際秩序への挑戦勢力に対する現状維持勢力の不作為が戦争誘発の要因である。

ミュンヘン会談においてドイツの軍事的膨張の意図を誤認した英国など欧州諸国の不作為こそが、第二次大戦勃発の起因であった。確執回避を優先するあまり対独宥和姿勢を取り、結局は大戦へと向かわざるを得なかった歴史の事実を顧みたい。

(わたなべ としお)